

# フランス語における文頭位置の-ment 型副詞に関する一考察

宮腰 駿

## 1. はじめに

本稿は文頭位置に置かれたフランス語の-ment 型副詞の分析において、発話論的アプローチが持つ研究上の可能性を示すことを目的とする。これまでのフランス語の副詞 (adverbe) および副詞類 (adverbial) の研究には大きく「構文論的分類研究」と「語用論的研究」が存在し、この 2 つのアプローチはこれまでに分類研究においても、個別の副詞記述においても、数多くの成果を残している。しかし、それぞれのアプローチには有効性がある一方で問題点も存在している。また、こうしたアプローチだけでは、副詞が持つ諸相の中でまだ明らかにできていない側面が存在している可能性がある。本稿では文頭位置に置かれた 4 つの -ment 型副詞 *naturellement*, *heureusement*, *franchement*, *personnellement* を議論の中心に据えながら、この 2 つの接近方法とは異なる発話論的アプローチを提示し、後者が副詞研究全体にいくつかの論点を提示しうることを明らかにする。

## 2. 構文論的分類研究と語用論的研究の批判的考察

### 2.1. 構文論的分類研究の検討

フランス語の副詞研究では-ment 型副詞を中心にしながらこれまで構文論的な分類を主眼とした研究が数多く行われてきた (Martin 1974, Mørdrup 1976, Borillo 1976, Schlyter 1977, Molinier 1990, Molinier et Levrier 2000 等)。この研究手法においては分裂文 C'est...que による焦点要素の抜き出し、パラフレーズ (d'une manière adj. 等) などのテストによって副詞を分類する方法が検討されてきた。こうした研究の最大の利点は、大量の副詞を定まった方式で形式的・計量的に処理をして分類を行うことができるという点にある。こうした研究の積み重ねにより、例えば Mørdrup (1976) や Molinier et Levrier (2000) のような研究においてはフランス語の-ment 型副詞の体系の全体像が明らかになっている。

しかし、テストベースの研究にはいくつかの欠点も同時に認めなければならない。まず、方法論に関しては、テストを用いる以上、反例の処理という問題がある。この点については例えば Nølke (1993) による Mørdrup (1976) に対する批判がある。Mørdrup (1976, p.15) は文副詞の分類について、*donc* のような接続機能を有する合接詞 (conjonctifs) は *oui* を伴っても、全体疑問文への応答に利用できないが、*franchement* といった離接詞 (disjonctifs) はこのような応答において使用可能であると指摘している。たしかに、(1a) はこのテストが妥当な結果を示している。しかし、一方で(1b)をみると Mørdrup (1976, p.14) が合接詞に類型している *pareillement* が応答に使用可能であることがわかる。また、(1c) のように疑問文の内容を変えることで離接詞 *franchement* もテストに対する反例となる。Nølke (1993, p.68) はこうした観察をふまえて、テストの結果は使用されている語彙

や調査対象である副詞に依存していると指摘している。

- (1) a. Marie est-elle fasciste ? \*Oui, donc. / Oui, franchement. (ibidem, p.67-68)<sup>1</sup>  
マリーはファシストか？ はい、したがって・はい、率直に言って。  
b. Marie est-elle (aussi) fasciste ? —Oui, pareillement. (idem)  
マリー(は・も) ファシストか？ はい、同様に。  
c. Marie est-elle partie ? —<sup>2</sup>Oui, franchement. (idem)  
マリーは出発したか？ はい、率直に言って。

このようにテストベースの分類研究については方法論的な課題がすでに指摘されている。しかし、フランス語の副詞研究の現状においては、こうした方法論はいまだに一定の支持を得ている。また、すでに批判を受けているテストが批判に対する応答をおろそかにしたままいまだに力を有しているということも指摘できる。例えば、je te dis adv. que... といった発言動詞を用いたいわゆる遂行分析 (cf. Schreiber 1972) は既にフランス語圏においては Ducrot (1980), Nef et Nölke (1982), Nölke (1993) による批判があるにもかかわらず、Molinier (2009) では発話行為副詞の分類研究においてこのテストが使用されている<sup>2</sup>。また、分類の精度と網羅性が問われるあまり、「いかなる原理によってテストによる観察と分類が可能になっているのか？」「副詞の多様な振る舞いの背景にはどのような仕組みが働いているのか？」といった課題が積み残されていることも指摘できる。

## 2.2. 語用論的研究の検討

研究史において、文全体を射程におさめる文副詞に関する研究が徐々に蓄積されるなかで、構文論的な研究が前提としている単文レベルにとどまらない研究が徐々におこなわれるようになった。そして、Ducrot et al. (1980) による「談話語 (Les mots du discours)」の研究や Nölke (1993) による「文脈副詞類 (adverbiaux contextuels)」の研究といった文脈や談話 (discours) との関係の中で副詞を考察する研究が次第になされたようになった<sup>3</sup>。また、発話行為 (énonciation) を副詞に関連付ける議論も活発となり、「発話行為副詞 (adverbes d'énonciation)」というクラスが設定されるようになった (cf. Martin 1974, Ducrot 1980, Molinier 2009 等)。こうした語用論的な関心に基づくことで談話の中での副詞の働きを明らかにすることができる。このようにして構文論的研究では扱うことが難しかった副詞の持つ機能的な諸相を研究の中で取り扱うことが可能になった。

<sup>1</sup> 分析上の焦点となる形式については斜字ボールド体で示す。

<sup>2</sup> ただし、Molinier (2009) は明示的に遂行分析を行っているとは述べておらず、あくまで Je te dis adv. que... をテストの 1 つとして利用している。このように批判されている分析方法を暗に使用するという点も批判できる。

<sup>3</sup> ほかにもフランス語を対象としたものとしては Roulet et al. (1987), Hansen (1998), Dostie (2004) 等も様々な枠組みに依拠しながら談話に根差した研究を行っている。

しかし、こうした構文論的議論からの進展が認められるとしても、語用論的な関心が2.1で指摘した副詞研究の課題に十分に取り組めているとは言えない。Ducrot (1980) やMolinier (2009) のような語用論的研究においてもまず分類することが大きな課題になっている。また「発話行為」という概念が研究に導入されてはいるが、この概念も分類基準の1つとして使用されており、より基礎的な課題として発話と副詞の関係性を問う姿勢は弱いといわざるを得ない。

3. ではここまで議論してきたフランス語副詞研究が抱えている問題点をふまえながら、第3の研究の方向性として発話論的アプローチに基づく副詞研究をとりあげる。

### 3. 発話論的アプローチに基づく研究の批判的考察と問題の所在

ここでいう発話論的アプローチとはAntoine Culoliを中心にして発展したいわゆる「発話述定操作理論 (TOPE, Théorie des Opérations Prédicatives et Énonciatives)」に着想を得た接近方法である。この理論の中でなされた研究は数多くあるが、その中で-ment型の形式についても研究が積み重ねられてきた<sup>4</sup>。以下ではこうした研究の集大成といえるPaillard (2021) を中心にこのアプローチについて検討する。

まずこのアプローチを特徴づけているのは、言語体系の中に構造的に組み込まれている単位としてMD (mots du discours, marqueurs discursifs) というカテゴリーを設定している点である。こうした問題意識の中で、Paillard (1998, p.10) の言葉を借りれば、「MDが何をするのか?」という語用論的な問い合わせではなく、「MDとは何なのか?」という問い合わせがこのアプローチでは追究されることとなる。この立論の上で、Paillard (2021) はクラスとしてMDを定義づけることに関して、以下のように述べている。この引用が指摘するように、発話論的アプローチはMDを言語外の事態に形式を付与していく発話行為のプロセスの中に取り込まれたものとしてとらえている。こうして、MD研究はあくまで発話行為研究の一環としてなされることとなる。

(2) Définir les MD comme une classe d'unités de la langue signifie qu'en tant que tels ils sont une partie intégrante de la production des énoncés c'est-à-dire de l'énonciation définie comme le processus consistant à donner une forme linguistique à un état de choses du monde défini comme le « à dire».

(ibidem, p.22)

MDを言語単位のクラスとして定義することは、このようなMDが発話文の産出に組み込まれていることを意味する。この発話文の産出とは、すなわち「言い表すべきもの」として規定される言語外世界の事態に言語形式を付与するというプロセスとして定義づけられる発話行為である。

<sup>4</sup> 本稿でのテーマと近い内容を扱っているものとしてはPaillard (1998, 2001), Paillard et al. (2012),そしてLangages 207号のMD特集 (cf. Paillard 2017)などがある。

このような MD 論に根差した形で Paillard (2021) では-ment 型の MD が取り上げられている。では、具体的にどのように分析は進められるのか。発話行為との関係のなかで MD を議論するとしても、発話行為を把握するための何らかの枠組みがなければこうした議論を行うことは困難である。そこで Paillard (2021) は「発話の場 (Scène énonciative)」(Paillard 2009) という枠組みを設定している<sup>5</sup>。この枠組みにおける発話行為は単なる「主体の行為 (l'acte d'un sujet)」ではなく、発話文を構成している「諸形式の構成 (l'agencement des formes)」から再構築しうるプロセスとして仮定されている (Paillard 2009, p.112)。つまり、あくまで言語形式から分析は始められる。そして、こうした再構築を行うにあたって、「発話 (dire)<sup>6</sup>」「意図 (vouloir dire)」「相互主体的空間 (espace intersubjectif)」という発話の場を構成する 3 要素が検討されている (Paillard 2021, p.23-25)。以下ではこのうち-ment 型の形式ともっとも関連の深い dire に着目して議論を行う。

この dire という概念を Paillard (2021) は以下のように事態を言語化する個人的で部分的な方法として特徴づけている。つまり、本来、ある発話がある事態を完全に言い表すことはできず、必ず同一事態を言いうるほかの言語化の存在が想定されることになる。こうした他の言語化の存在可能性については、例えば「言い直し (reformulation)<sup>7</sup>」や「明示化 (explication)」といった行為をこの可能性の具体的な表れとしてとらえることができる (Paillard 2009, p.116)。

(3) Un dire est défini comme une façon partiale et partielle d'exprimer par un énoncé un état de choses considéré comme l'objet du dire : partiale au sens où l'énoncé exprime ce qui, pour un sujet, est de l'ordre de la croyance, du savoir ou encore de la perception de l'état de choses ; partielle signifie qu'un énoncé (ou le plus souvent une suite d'énoncés) échoue à dire pleinement l'état de choses en question. (Paillard 2021, p.23)

ある 1 つの発話は発話文によって発話対象とみなされている事態を表現する、偏っていて、部分的な方法として定義される：この「偏っている」とは、発話文がある主体にとっての事態に対する信条や知識あるいは知覚の次元にあるものを表現するという意味である；「部分的」とは発話文 (あるいはたいていの場合は発話文の連続) は問題となる事態を完全に述べることに失敗するという意味である。

<sup>5</sup> 伊藤 (2015, p.140) は「発話の場面」という訳語を与えている。この訳語の選定については十分な理論的な考察が必要であるため、本稿では議論は行わないこととする。

<sup>6</sup> この dire には「言うこと」という訳語を与えることもできるが、この訳語では翻訳文が複雑になってしまう恐れがある。そこで本稿では一貫して「発話」という訳語をあてる。

<sup>7</sup> この概念については Rossari (1997) をあわせて参照。

こうした *dire* のもつ特性から出発をして、Paillard (2021) は MD 研究を行っている。Paillard (2021, p.25) の議論においては、「発話の場のどの構成要素に関わっているか」という限定に関する基準と形態的な特徴からいくつかの MD のクラスが想定されている。このクラスの中で *dire* を限定し、接尾辞-*ment* を用いて構成される形態は「カテゴリー化の MD (MD catégorisants)」と呼ばれている (*idem*)<sup>8</sup>。本稿では主として-*ment* 型副詞に着目するため、以下ではこのカテゴリー化の MD に焦点を当てた検討を行う。

まず、先行研究との関係でいえば、この種の MD は部分的に Molinier et Levrier (2000) における「文副詞」に相当するものとしてとらえられている (Paillard 2021, p.34)。そして、分析に際しては、カテゴリー化の MD は<左方文脈 MD p>という構造の中で把握されている (*ibidem*, p.28)。この構造のもとで、カテゴリー化の MD は左方文脈にすでに導入されている事態のなかで当該 MD が語彙的に導出できるカテゴリーに含まれるもの p として示す機能を有していると特徴づけられる (*idem*)。例えば、(4)では、前件において「ポールの遅刻」という事態が確認されている。この事態は様々な構成要素を含んでいるが、この発話においては「電車に乗り損ねた」という要素 p が遅刻の論拠として注目されている。ここで *visiblement* であれば p は「可視的 (visible)」という意味カテゴリーに立脚した論拠として示される。また *naturellement* であれば p は「自然・道理 (naturel)」という意味カテゴリーに立脚した推論となる。このようにカテゴリー化の MD は左方文脈との関係と各形式の語彙的な意味に基づいたクラスである。

(4) Paul est en retard. — *Visiblement / naturellement* il a raté son train.

(*idem*, 一部改変)

ポールの到着が遅れている。明らかに・当然、彼は電車に乗り損ねたんだ。

またすでに明らかなように、カテゴリー化の MD は状況的・文脈的にすでに提示されている事態に引き続いているという点で、「常に 2 番目 (toujours second)」におかれるという文脈上の特性をもつ (*ibidem*, p.36)。この点については、構文論的分類研究と大きく異なる立場を Paillard (2021) はとっている。Molinier et Levrier (2000) は接続機能を有する合接詞に対してこういった左方文脈との繋がりを指摘していたが、離接詞についてはこのような指摘をしていなかった (Paillard 2021, p.36)。つまり、Paillard の議論においては *franchement* のような離接詞と重なることが多いカテゴリー化の MD も基本的に左方文脈との関係を考慮して検討されることになる<sup>9</sup>。

以上のように「発話行為」という視座から、-*ment* 型副詞を「カテゴリー化の MD」と

<sup>8</sup> *dire* を限定するものとしては他には「観点 (points de vue)」「スクリーン (écran)」「不変化詞 (particules)」という 3 種の MD が指摘されている (Paillard 2021, p.25)。

<sup>9</sup> Tous les AC sont des connecteurs (すべての文脈副詞類 adverbiaux contextuels は連結辞である) という Nölke (1993, p.83) の指摘もこの問題関心に重なるものである。

して特徴づけた Paillard (2021) はこれまでの副詞研究と大きく異なっている。まず第一に、このアプローチにおいて特徴的なのは、発話の場とこれを構成する *dire* という原理を明確に設定している点である。発話文 *p* という結果的に得られる産出物だけでなく、発話へと至る過程の中に常にほかにありうる形式 *p'* を想定するという議論は、実際の産出時点よりも前に再構築されるプロセスとして発話をとらえた議論といえる。また-*ment* 型の形式のそれぞれが持つ語彙意味的な性質を「カテゴリー」と呼び特徴づけた点もこれまでの研究と異なる。これは-*ment* 型副詞がもつ語構成上の特徴をとらえたものとみなせる。まとめれば Paillard (2021) の議論はこれまでの副詞研究とくらべて、より原理追求型の議論であると同時に意味論的な関心を強く持ったものとしてとらえられる。

しかし、この Paillard (2021) の研究についても問題点が指摘できる。特に本稿で注目するのは「カテゴリー化の MD」というクラスの設定である。この議論では-*ment* 型副詞のうちで伝統的に「文副詞」と呼ばれてきたもの一部がカテゴリー化の MD とみなされている。この立論は従来の副詞論とは大きく異なっている。しかし、Paillard (2021) は当初より MD 論として記述されているため、この立論の正当性がこれまでの副詞研究との関係の中で十分に検証されていない。この問題点をふまえると、Paillard (2021) が示した発話論的な研究方向を MD という新たなクラスの設定から出発して議論するだけではなく、より従来の副詞研究との関係の中からとらえる必要性が生じる。そこで本稿では Q1 「『カテゴリー化の MD』という特徴付けからどのような議論が展開できるのか？」と Q2 「発話論的アプローチはどのような論点を従来の副詞論に対して提示できるのか？」という 2 つの問い合わせを設定する。そして、以下ではこの問い合わせに具体的な形で取り組むために、文頭という共通した位置におかれた 4 つの-*ment* 型副詞を対象として観察を行う。

#### 4. 文頭位置に置かれた-*ment* 型副詞の発話論的研究

本章では前章で提示された研究課題について議論するために、冒頭であげた 4 つの文頭位置に置かれた-*ment* 型副詞の観察を行う。観察に際してはこれまでの副詞・MD 研究の知見を活用しながら発話論的な解釈を試みる。なお、本稿ではそれぞれの副詞の厳密な分類よりも、意味価値や談話における機能に着目した記述を行う。したがって、「文頭位置の-*ment* 型副詞」という呼称は伝統的な「文副詞」とは異なる。あくまで当該発話文が生起した際の線状的な語順における文頭位置に置かれた副詞に着目をする。まず、以下では観察の手始めに文頭位置に置かれたそれぞれの副詞の意味価値を確認する。

まず *naturellement* についてである。文頭位置に置かれたこの副詞はおおむね後続する内容について「当然」「もちろん」といった形での判断を示す。この副詞はこれまでの副詞研究では「態度の離接詞 (disjonctifs d'attitude)」の下位区分に含められ (Mørdrup 1976, p.29)、Molinier et Levrier (2000, p.92) は「モーダル詞 (modaux)」と呼ばれる下位区分に類型していた。Vladimirska (2008, p.4) は MD としての *naturellement* について「自然の力 (force de la nature)」というタームを用いて記述を行っている。例えば一見すると以下の例の前件と後件の間には「矛盾した」関係がある (idem)。ここでは *mais* と *naturellement*

のインタラクションに注目する必要がある。まず *mais* は前件と後件を反対の関係にあるものとして示す。すなわち「公務員の減少」という事態から普通導かれる「公共サービスが影響を受ける」という結論が導かれていないことが表される。そしてこの *mais* による論証に上乗せする形で、*naturellement* はこの副詞が示す意味カテゴリー *nature* を通じて後件が自然の力、言い換えれば「道理」に基づく推論であることを表している。結果的にこの発話は *naturellement* によって構築される推論を通して、「公共サービスの低下」が公務員削減政策に対する反論の論拠にはならないことを明確にしている。この *naturellement* が示す自然の道理 *nature* に基づいた形で行う推論を本稿では便宜的に「論理的推論」と呼ぶ。

- (5) Il faut réduire le nombre des fonctionnaires mais ***naturellement*** les services publics n'en seront pas affectés (J. Chirac, cités dans Vladimirska 2008, p.4)  
公務員の数は減らす必要があります。しかし、当然のことながら、公共サービスはこれに影響を受けないでしょう。

次に *heureusement* の観察を行う。文頭位置に置かれたこの副詞は概ね後続する内容について、「幸いにも」「運よく」といった判断を示す。これまでの副詞研究ではこの副詞は「評価副詞 (évaluatifs)」(Molinier et Levrier 2000, p.87, Nölke 1993, p.83)、「事態評価の副詞」(青井 2012, p.156)、「評価的モダリティ (modalités appréciatives)」(Le Querler 1996, p.90-94) のように「評価」に関わる副詞として記述されてきた。例えば、以下の例では、前件が示す「不幸」な事態の中において、*heureusement* 以下の内容は「幸い」と評価できる側面を表している。この例について Lamiroy et Charolles (2004, p.57) は対立関係を表す *mais* との置き換えが可能であると指摘しているが、*heureusement* による判断表示によってこの論証が可能になっていると考えられる。本稿ではこの *heureusement* が示す価値を便宜的に「評価的判断」と呼ぶ。

- (6) Depuis le début de l'Intifada, mon activité avait baissé d'environ 50%.  
***Heureusement***, j'avais encore un gros client qui me permettait de tenir le coup.  
(*Le Monde*, 2003/06/02, cités dans Lamiroy et Charolles 2004, p.57)  
インティファーダがはじまって以来、私の活動力はおよそ 50% 低下しました。  
しかし幸いなことに、わたしには持ちこたえることを可能してくれる大顧客がまだいたのです。

3つ目に観察する副詞は *franchement* である。文頭位置に置かれたこの副詞は「率直に言えば」といった価値を示す。この訳語が示しているように、この副詞は発話行為に関わる副詞としてとらえられている。例えば、以下の(7b-c)のパラフレーズでは *dire* や *parler* といった発言動詞への意的修飾によってこのことが示されている。発話のあり様を

記述していることがこのパラフレーズでは示されている<sup>10</sup>。これまでの研究では、「文体の離接詞 (disjonctifs de style)」 (Molinier et Levrier 2000, p.66-68)、「発話行為の副詞」 (青井 2012, p.156)、「発話行為入射 (incidence énonciative)」 (Hermoso 2009, p.28-29) といった分類によってこの副詞は記述されている。本稿では文頭位置の *franchement* を便宜的に「発話の様態」を表示する副詞ととらえる。

- (7) a. ***Franchement***, ce spectacle est nul.

(Molinier et Levrier 2000, p.66-67, 一部改変)

率直にいえば、この芝居はひどい。

- b. ***Je te dis franchement*** que ce spectacle est nul. (idem)

この芝居がひどいと私は君に率直に言う。

- c. ***A franchement parler***, ce spectacle est nul. (idem)

率直に言って、この芝居はひどい。

最後に *personnellement* の観察を行う。文頭位置に置かれたこの副詞は概ね(8a)のように「個人的には」「自分の考えでは」といった価値を示す。これまでの研究では「文体の離接詞」 (Molinier et Levrier 2000, p.72-76, Molinier 2003, p.361-366) といった形で *franchement* と同じクラスに含まれた副詞として記述されていた。しかし、一方で Hermoso (2009, p.29-30) は事例に基づき *je pense* や *je suis contre* といった主観的な述語への修飾関係を持つ「モーダル入射 (incidence modale)」の副詞としてこの副詞をとらえている。したがって、*personnellement* は *franchement* とはやや異なる位相を持っていると考えられる。また、同じ位置に置かれても、しばしばこの副詞は(8b)のように談話の流れの中で「公 (public) / 私 (privé)」という個人が持ついくつかの側面、言い換えればペルソナの割り振りに関与することがある。本稿ではこのようなケースを考慮して、便宜的に文頭位置におけるこの副詞を「発話の立場」を表示する副詞としてとらえる。

- (8) a. ***Personnellement***, cela me convient. (Molinier 2003, p.361)

個人的に私はこれを気に入った。

- b. — ***Personnellement, professionnellement et en tant que candidate***, comment avez-vous vécu cette période de confinement ?

— ***Personnellement***, j'ai vécu ce confinement comme un temps offert pour me poser, prendre des nouvelles de mes proches et faire une partie de ce que j'avais toujours remis au lendemain.

***En tant que maire de Pontivy***, j'ai pris pleinement la mesure de cette crise sanitaire en déclenchant dès le 2 mars 2020 le Plan communal de sauvegarde et en mettant

<sup>10</sup> 2.1 で前述したようにこの種のパラフレーズを用いる分析には再検討の余地があり、あくまでこの引用は先行研究での分析を端的に提示するためのものである。

tout en œuvre pour préserver la population, ainsi que les agents de la Ville et de la communauté de communes de ce virus.<sup>11</sup>

「個人的に、職業的に、そして候補者としてあなたはどのようにこの自宅隔離の期間を過ごしました？」

「個人的には、私はこの自宅隔離の期間を自分に与えられ、近親者とやり取りをし、いつも翌日に持ち越してきたことの一部を行うために与えられた時間として過ごしました。

Pontivy の市長としては、2020 年 3 月 2 日から市の感染対策計画を実施し、このウイルスから市民と市と地域コミュニティの職員を守るためのあらゆる策を講じ、十分にこの公衆衛生上の危機に対する対応を取りました。」

ここまで議論をまとめると、文頭位置においてそれぞれの副詞は以下のような価値・機能を持つ副詞としてとらえられる。

(9) Naturellement	論理的推論	Heureusement	評価的判断
Franchement	発話の様態	Personnellement	発話の立場

これらの価値は今の段階ではお互いの関係性がはっきりとしない状態にある。こうした機能分類を全体的に把握する際に有力な手法として、階層的なモデルによる把握という手法がある。こうした階層的なモデルに基づく議論において、明瞭かつ包括的なモデルを設定・使用し、かつ本稿と比較的近い対象を扱っている渡邊 (1995) の研究にここでは着目する。渡邊 (1995) は「発話の階層的モデル」によって、donc, alors, aussi, ainsi というフランス語の 4 つの「連結辞 (connecteurs)」を記述している。渡邊 (1995, p.33) は「どのような位相において連結を行なうのか」という観点から分類を行っている。そして、結果的に最上位の「発話行為 (énonciation)」には donc、1 つ下の「発話文 (énoncé)」には alors、さらに 1 つ下の「命題 (proposition)」には aussi、そして最下位の「様態 (manière)」には ainsi が対応するという結論を提出している (idem)。

このモデルに基づいて 4 つの副詞の先行研究での記述と用例の観察を振り返ると、franchement と personnellement は命題内容の提示のあり方を述べている点で最上位の発話行為の位相に位置付けられると考えられ、ある文内容に関する推論ないし判断を示している naturellement と heureusement はより下位の命題の位相に位置付けられるとみなせる<sup>12</sup>。このように階層的なモデルを設定することで、それぞれの意味機能の差異を階層における位相の問題としてとらえなおすことが可能になる。こうした副詞の機能を体系

<sup>11</sup> [https://actu.fr/bretagne/pontivy\\_56178/municipales-2020-pontivy-une-campagne-de-proximite-pour-christine-le-strat\\_33898537.html](https://actu.fr/bretagne/pontivy_56178/municipales-2020-pontivy-une-campagne-de-proximite-pour-christine-le-strat_33898537.html) 最終閲覧日 2023/03/31

<sup>12</sup> -ment 型副詞を連結辞としてとらえるかどうかという問いは、そもそもの「連結辞」の定義から議論が必要になるため、本稿ではこの点には踏み込まない。

的に把握する方法はしばしば錯綜した関係を持つ複数の副詞を1つの枠組みから捉えることを可能にするという点で有力な方略といえる。

しかし、この階層的なモデルを用いた分析にはいくつかの問題点が指摘できる。まず、第1の問題点はこうした階層的なモデルが何をとらえているのかという点である。ここで注目できるのは渡邊(1995)が「発話の階層的モデル」という術語を使用している点である。ここでいう「発話」とは実態としては既に構築されきった「言われたこと(dit)」であり、事態を言語化するプロセスとしての「発話」を正面から把握したものとはとらえられない。

また、より具体的な方法論上の課題は、*franchement*と*personnellement*の差異を階層上において如実に把握できないという点にある。どちらも渡邊(1995)のモデルに依拠すれば発話行為の位相に関わる副詞として把握されるが、先行研究(Hermoso 2009)に基づけばこの2つの副詞は異なる位相に関わっている。階層的なモデルをより詳細に設定しなおすという議論の手法もありえるが、この方法論では第1の問題点を乗り越えることができず、発話論的な議論を展開することが困難となる。

そして、3点目の問題点として、こうした階層的なモデルによる記述が研究上のバイアスの源になり得るということを指摘する必要がある。このバイアスとは、階層の上位レベルに関与し、文内容から距離をとった位置に位置付けられ、発話の提示のあり様を記述する*franchement*や*personnellement*といった副詞を発話において極めて周辺的な要素であるととらえる見方である。確かに、この見方は何らかの基準に依拠した分類の結果としては妥当なものとみなせる。しかし、この見方だけにとらわれると、文内容とこの種の副詞の関係を把握することが一向になされないという問題が生じる。文内容を表示する言語形式もこうした副詞もどちらも「発話」を構成しているのであり、両者の関係性を把握することが、発話論的アプローチに立つ以上、必要となる。

以上のように、階層的なモデルに基づく議論は分類という点では複数の副詞の差異を1つの枠組みの中でとらえる際の有効な手法として認められるが、発話をプロセスとして把握しながら議論を展開する発話論的アプローチからみるといくつかの問題点を抱えていた。以下ではこうした問題点をふまえながら、より発話の一翼を担う形式として副詞をとらえるために、階層論において問題のあった*franchement*と*personnellement*を例にして議論を続けていく。

まず*franchement*について発話論の立場から議論する際に、示唆的であるのは以下のAnscombe(1992, p.30)による*sincèrement*の記述である。この副詞はこれまでの研究において*franchement*と共に通したクラスに含まれることが多いものであり、*franchement*の分析においても以下の記述は参考となる(Molinier et Levrier 2000, p.66-68, Molinier 2009, p.11)。この引用で注目すべきであるのは、*à partir de*という起点を示す複合前置詞によって文頭位置の*sincèrement*をとらえているという点である。

(10) En disant : “Sincèrement, je suis content”, je ne parle pas de ma sincérité, mais

à partir de ma sincérité. (Anscombe 1992, p.30)

Sincèrement, je suis content (正直に言えば、私は満足だ) と述べながら、私は自らの誠実さについて話しているのではなく、自らの誠実さから話しているのだ。

この議論を *franchement* に置きかえると、文頭の *franchement* が示しているのは「率直さ (franchise) から発話する」という価値であるとみなせる。ここで検討が必要なのは *franchise* というカテゴリーの性質である。このカテゴリーは 1 つの解釈としては何らかの「障壁」から自由になることを意味していると理解できる。そして、このカテゴリーが発話と関係付けられれば、発話へのアクセスに対して存在する常識や対人関係から生まれる様々な障壁から自由になることが可能になり、結果的に率直な発話が産出される。このように *franchement* をとらえると、階層的なモデルにおいて文内容からみて周辺的な外側の位相にしか位置づけることができないこの副詞が、実際には発話産出プロセスの根幹において機能を果たしている可能性が浮かび上がってくる。より先の複合前置詞に即していえば、「発話を産出する起点」にある要素を文頭位置における *franchement* が表示しているという見方が成り立つ。この議論から再び *franchement* の観察を行うと、これまでの議論では把握することが難しかったこの副詞がもちうる機能を見出すことができる。

前述したようにこれまでの分類研究では文副詞の下位分類のうち、*franchement* は「離接詞」というクラスに含まれるものとして記述されてきた。この離接詞とともに文副詞を構成しているのが合接詞であった。これまで後者については接続機能を有するという点で左方文脈が必要であるという特徴づけがなされてきた (Molinier et Levrier 2000, p.55)。では離接詞 *franchement* の機能については左方文脈との関係のなかでどのように特徴づけることができるのだろうか。

この点について以下の事例を観察する。この例の左方文脈は *franchement* 以下と比べれば、平易な事態の記述であるとみなせる。そして、この記述された事態に対して、*franchement* 以降では個人の素直な願望が述べられている。つまり、この例には「事態記述⇒願望の表示」という談話の流れを見出すことができる。この談話の移行の一翼を担っているのは *franchement* の機能であると考えられる。こうした移行機能を本稿では「談話展開機能」と特徴づける。

(11) Héloïse est née à Paris, juste avant notre départ pour Vienne. Là-bas nous avons eu Hippolyte (onze ans et demi) et Hilda (six ans). ***Franchement*** je n'ai souhaité que les deux premiers, mais j'ai accepté les autres avec bonne humeur, malgré ce qu'Hector appelle notre gueuserie chronique.

(*Les Amies d'Héloïse*, cités dans Paillard 2021, p.291)

エロイーズはパリで生まれ、それは私たちがウィーンへと出発するちょうど

前の時のことであった。あちらでは私たちにはイポリット（11歳半）とイルダ（6歳）がいた。本音を言えば、私は最初の2人だけを望んでいた。エクトールは貧乏暮らしを慢性的なものだとよんでいたが、私は機嫌よく他の子どもも受け入れた。

この機能には発話を構築するプロセスが関係していると考えられる。まず、franchiseという意味カテゴリーが持ち出されて、本心・率直さに依拠した発話の可能性が生じる。そして、ここでの障壁は、記述されている事態をふまえるとくすでに生まれた子供について「本当はもういらなかった」という内容を述べることは普通憚られる>という旨のいわば常識に基づく障壁であると考えられる。ここで franchiseによりこの障壁から解放されることで、結果的に後件が言いうる対象としての地位を得て、率直な願望の表示が可能になっている。文脈の流れに注目すると、ここでは franchiseという性質を伴って提示されていない左方文脈の内容があり、この内容を受けて franchiseという性質が後件の発話を構築する起点に喚起され、結果的に発話文の産出が行われることになる。したがって、先の談話の流れをより詳細に記述すれば「事態記述⇒障壁の暗示⇒障壁からの解放⇒願望の表示」となる。このように発話構築プロセスの中で franchementは後続する内容に言いうる対象としての地位を与えることを通じて談話を展開する機能を有している。

また、franchementは以下の例のように「言いづらいことを言えるようにする」という形で障壁を解消することがある。この例における後件の内容は「言いにくいこと」または「言いたくないこと」である。しかし、ここでは franchiseが談話の中で持ち出されることにより、後件ははじめて言いうる対象としての地位を獲得し、結果的に言語化されている。つまり、この生起においても franchementは発話構築プロセスの根源にある要素を提示する機能を有していると考えられる。

- (12) Ça me gêne de le dire, mais franchement ça ne me plaît pas. (作例)  
言いたくないんだけど、本音を言えば、私はこれが気に入らない。

次に personnellementについて分析を行う。以下の例はフランスの著名な哲学者 Michel Onfray のインタビュー記事である。この Front Populaire とは Onfray が創刊した雑誌である。そして、ここでは大統領選挙がテーマとなっている。この例における personnellement は Onfray がもつ「私」の側面を提示しているとみなせる。前述の「発話の立場」という特徴づけに依拠すると、後続する「どの候補者も支持しない」という意見の立脚点が私的な立場であることが(13)では personnellementによって明示されている。立場を言語的に明確にしない状態では、Front Populaire に影響力を持つ公的な立場から発話をしているのかどうかということについて、Onfray はコントロールできなくなり、立場のとらえ方は他者にゆだねられることになる。つまり、personnellementによって「私の立場」というカテゴリーをはっきりと引き合いに出すことで、立場についてコントロールした

状態で文内容を述べることが可能になる。

(13) *Personnellement*, je ne soutiendrai aucun candidat à la présidentielle. Front Populaire pourra le faire s'il le souhaite, mais pas moi.<sup>13</sup>

個人的には大統領選ではどの候補者も支持しないつもりだ。Front Populaire はそうするかもしれない、お望みならば。しかし、私はしない。

一見すると、この *personnellement* も *franchement* と類似した分析が可能であると考えられる。しかし、ここでは「率直さ」と「私」という意味カテゴリーの差異に着目する必要がある。前者は障壁から自由になることを表すものであった。一方、後者は地位や役職といった特定の社会的な状況の中で構築されるより個別的な性質である。前述の例でも「Onfray という著名な人物がインタビューを受けている」という状況にこのカテゴリーは存在し、ここでの「私」とはあくまでこの時点における Onfray がもつ社会的な側面である。こうしたカテゴリー間の性質の違いを勘案すると、*personnellement* を *franchement* と同じような形で発話に関係づけることはできない。この 2 つの副詞の差異について検討する際には「発話」だけでなく、「発言」という問題も考慮に入れると有益である。*franchement* が言語内在的な「発話」というシステムに関わるとするならば、*personnellement* が関わるのは社会的な役割を担うある人物が、ある特定の状況の中で行う「発言」と呼べるものであると考えられる。前述の *personnellement* の「立場のコントロール」という機能も「発言の際の状況に合わせた必要な調整」と言い換えることができる。また *franchement* において認められた談話展開機能もこの例における *personnellement* には見出せず、あるテーマに対して意見をどのような立脚点を示して発言するかということにこの副詞は関係している。したがって、この 2 つの副詞は発話構築プロセスに異なる形でかかわっていると考える必要がある。

以下ではここまで記述に依拠しながら、3. で設定した本稿における 2 つの問題について検討する。

まず、第 1 の問題は Q1 「『カテゴリー化の MD』という特徴付けからどのような議論が展開できるのか?」というものであった。この問い合わせについては、本稿の議論から大きく 2 つの議論の可能性を指摘することができる。まずは、Paillard (2021) による議論をより発話構築プロセスに根差した形で展開するという可能性である。前述の *franchement* に関する発話論的な分析に基づくと、一見産出された文において周辺的のように思える形式も、発話を構築するプロセスの中では、その形式が語彙的に示すカテゴリーの表示を通じて中核的な機能を果たしているという可能性を指摘することができる。また一方で、Paillard (2021) 以降の発話論的な副詞研究が取り組むべき課題も浮かび上がった。観察と分析によって 4 つの副詞のそれぞれが階層の中で異なる位相をもつという結果は得ら

<sup>13</sup> <https://www.francesoir.fr/opinions-entretiens/michel-onfray-personnellement-je-ne-soutiendrai-aucun-candidat-la> 最終閲覧日 2023/03/31

れている。この結果を発話論的にとらえなおすと、カテゴリー化の対象となる作用域が個々の MD・副詞において異なるという示唆を得ることができる。こうした差異を分類する作業においては従来の研究を積極的に発話論的な議論に接続していくことがもとめられる。また、*personnellement* の議論から、「発話」だけでなく、具体的な社会的文脈の中でなされる「発言」にも注目をして言語使用をよりくまなく検討する議論の必要性が浮かび上がった。この違いをとらえることによって、言語使用の全体における発話というシステムの位置づけを副詞研究の観点からより鮮明に論じる道が開けると考えられる。

第 2 の問題 Q2 「発話論的アプローチはどのような論点を従来の副詞論に対して提示できるのか？」については大きく 3 つの論点を提示する。まず、文副詞および MD と命題内容の関係を再検討する必要性がある。これまでの言語研究における一般的な見解をふりかえると、例えば、「発話行為の副詞」に関する中右 (1980, p.206) の議論、文脈副詞類に関する Nølke (1993, p.76) の議論、「語用論的標識 (pragmatic markers)」に関する Fraser (1996, p.324) の議論、談話標識に関する Hansen (1998, p.236) の議論等ではあくまで命題内容とこの種の言語形式については「強い結びつきはない・あくまで外側の要素である」という立場がひろくとられてきた<sup>14</sup>。しかし、*franchement* の発話論的分析から示唆されたように、こうした談話的な機能を持つ形式の一部に関しては命題内容を構築する際の起点にある要素を示しているという記述の可能性もある。発話産出プロセスに依拠してこのことを言い換えれば、これはプロセスにおいて *franchement* が示すカテゴリーは文意味の中核となる主語と述部からなる述定関係 (relation prédicative) の構築以前にある発話産出の起点に位置付けられるという主張である。また対比的に、*personnellement* は述定関係の構築よりも後の時点において「発言」を構築するためのカテゴリーを表示していると考えられる。したがって、談話的な形式と命題内容の関係性に関しては、その形式の意味を発話産出プロセスに関係づけながら議論を行うことが求められる。第 2 の論点は分析概念と分析レベルに関する問題である。前述のように発話行為や談話という枠組みの中で、フランス語の副詞は研究されてきた。しかし、こうした概念について明瞭な定義は設定されないことが多い。またこうした概念に依拠しながらも、実態としては構築されきった *dit* をどのように分類するのかが焦点となってきた。このような *dit* レベルのみに依拠した分析は *dire*、すなわち発話産出プロセスを問題にしなければ見出すことが難しい論点の可能性をあらかじめ否定している議論である。また、この方向性では副詞の分類に終始することになるため、「分類さえできればよい」という形で一般性を希求しない特殊論に陥る可能性が高い。第 3 の論点は副詞を研究する意義の再検討という点である。Nølke (1993, p.70) は副詞分類を行う際に 4 つの問題意識を持つことの有用性を指摘しているが、その中に *Pourquoi classifier ? (なぜ分類するのか?)* という問い合わせがある。本稿の議論からこの問い合わせに答えるならば「発話産出プロセスを明らかにするため」という回答を提出することができる。このような意義の再検討が副詞・

<sup>14</sup> Paillard (2017, p.7) はこのような見解が「アプローチの違いをこえたところ (Par-delà les différences d'approches)」でコンセンサスとして成り立つと指摘している。

MD 研究には求められる。そして、単に副詞論に資するためだけの分類ではなく、より一般的な課題に取り組むための 1 つの方略としての議論がなされる必要があり、この点についてはアプローチの差異は問題とはならない。

## 5. おわりに

本稿ではこれまでの副詞研究に対する批判から生じる問い合わせに対して、4 つの-ment 型副詞の分析を通じて応答を試みた。そして、副詞研究なし MD 研究に対して、発話論的アプローチが重要な示唆を与えることを明らかにした。

最後に簡潔に今後の研究における課題にふれることとする。まず、本稿であつかった事例とは異なる文頭位置の副詞の観察からここでの議論を再検討する必要がある。また、より発話産出プロセスに根差した副詞研究を行うためには異なる位置におかれた副詞の検討も求められる<sup>15</sup>。さらに、より特化した課題として Paillard (2021) が提示する異なるクラスの MD とカテゴリー化の MD の比較研究を行うことが求められる。また記述概念の考察という理論的な課題も存在する。そして、本稿が提示した議論をより一般的に検証していく際には、個別言語の壁を越え、ロマンス諸語における-mente の機能を対照言語学的に追究していくことがもとめられる。

## 参考文献

- 青井明 (2012) : 「フランス語における文頭位置の副詞について」『国際基督教大学学報. I-A 教育研究』 54, pp.155-164.
- 伊藤達也 (2015) : 「語彙意味論に適する『相互依存的』構成性について」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』 48, pp.135-143.
- 中右実 (1980) : 「第 4 章文副詞の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座第 2 卷文法』大修館書店, pp.157-219.
- 宮腰駿 (2022) : 「副詞 personnellement の<多変性>について」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』 37, pp.1-28.
- 渡邊淳也 (1995) : 「連結辞と発話の階層的構成—donc, alors, aussi, ainsi の比較から—」『フランス語学研究』 29, pp. 25-37.
- Anscombe, J-C. (1992) : « Espaces discursifs et contraintes adjectivales sur les groupes nominaux à article zéro », De Mulder, W. et al. (éds), *Énonciation et parti pris*, Rodopi, pp.17-33
- Borillo, A. (1976) : « Les adverbes et la modalisation de l'assertion », *Langue française*, 30, pp.74-89.
- Dostie, G. (2004) : *Pragmaticalisation et marqueurs discursifs*, Duculot.
- Ducrot, O. (1980) : « Analyses pragmatiques », *Communications*, 32, pp.11-60.
- Ducrot, O. et al. (1980) : *Les mots du discours*, Minuit.
- Fraser, B. (1996) : « Pragmatic Markers », *Pragmatics*, 6-1, pp.322-343.
- Hansen M-B M. (1998) : « The semantic status of discourse markers », *Lingua*, 104, pp.235-260.
- Hermoso, A. (2009) : « *Franchement et personnellement* : deux attitudes énonciatives, deux moments de

<sup>15</sup> personnellement については宮腰 (2022) においてより網羅的な記述を行っている。

- l'énonciation », *Langue française*, 161, pp.23-38.
- Lamiroy, B. et M. Charolles (2004) : « Des adverbes aux connecteurs : *simplement, seulement, malheureusement, heureusement* », *Travaux de linguistique*, 49, pp.57-79.
- Le Querler, N. (1996) : *Typologie des modalités*, Presses Universitaires de Caen.
- Martin, R. (1974) : « La notion d'«adverbe de phrase»: essai d'interprétation en grammaire générative », Rohrer, C. et N. Ruwet (éds), *Actes du colloque franco-allemand de Grammaire Transformationnelle II*, Max Niemeyer Verlag, pp.66-75.
- Molinier, C. (1990) : « Une classification des adverbes en -ment », *Langue française*, 88, pp.28-40.
- Molinier, C. (2003) : « *Personnellement*, un marqueur de singularité », Combettes, B. et al. (éds), *Ordre et distinction dans la langue et le discours*, Champion, pp.357-371.
- Molinier, C. (2009) : « Les Adverbes d'énonciation. Comment les définir et les sous-classifier ? », *Langue française*, 161, pp.9-21.
- Molinier, C. et F. Levrier. (2000) : *Grammaire des adverbes. Description des formes en -ment*, Droz.
- Mørdrup, O. (1976) : *Une analyse non-transformationnelle des adverbes en -ment*, Akademisk Forlag.
- Nef, F. et H. Nølke (1982) : « A propos des modalisateurs d'énonciation », *Revue Romane*, 17-2, pp.34-54.
- Nølke, H. (1993) : *Le regard du locuteur : Pour une linguistique des traces énonciatives*, Kimé.
- Paillard, D. (1998) : « Les mots du discours comme mots de la langue », *Le Gré des langues*, 14, pp.10-41.
- Paillard, D. (2001) : « Les mots du discours comme mots de la langue : pour une typologie formelle », *Le Gré des langues*, 16, pp.99-115.
- Paillard, D. (2009) : « Prise en charge, commitment ou scène énonciative », *Langue française*, 162, pp.109-128.
- Paillard, D. (2017) : « Comparaison des marqueurs discursifs : introduction », *Langages*, 207, pp.5-16.
- Paillard, D. (2021) : *Grammaire discursive du français : Étude des marqueurs discursifs en -ment*, Peter Lang.
- Paillard, D. et al. (2012) : *Inventaire raisonné des marqueurs discursifs du français : Description-Comparaison-Didactique*, Éditions Université Nationale de Hanoi.
- Rossari, C. (1997) : *Les opérations de reformulation*, 2<sup>e</sup> édition, Peter Lang.
- Roulet, E. et al. (1987) : *L'articulation du discours en français contemporain*, 2<sup>e</sup> édition, Peter Lang.
- Schlyter, S. (1977) : *La place des adverbes en -ment en français*, Thèse, University of Konstanz.
- Schreiber, P. A. (1972) : « Style Disjuncts and the Performative Analysis », *Linguistic Inquiry*, 3-3, pp.321-347.
- Vladimirská, E. (2008) : « À propos de *naturellement, bien entendu* et *bien sûr* », *L'Information Grammaticale*, 119, pp.3-7.

(みやこし しゅん / 筑波大学大学院)